

# 精霊たちの棲む大地

## 夏を告げる精霊



lyric by aono

photo by hiros



北の大地に夏が来る 夏を告げる精霊が南の風を導いて

まもなくここにやってくる

夏を告げる精霊が 北の大地を巡る間

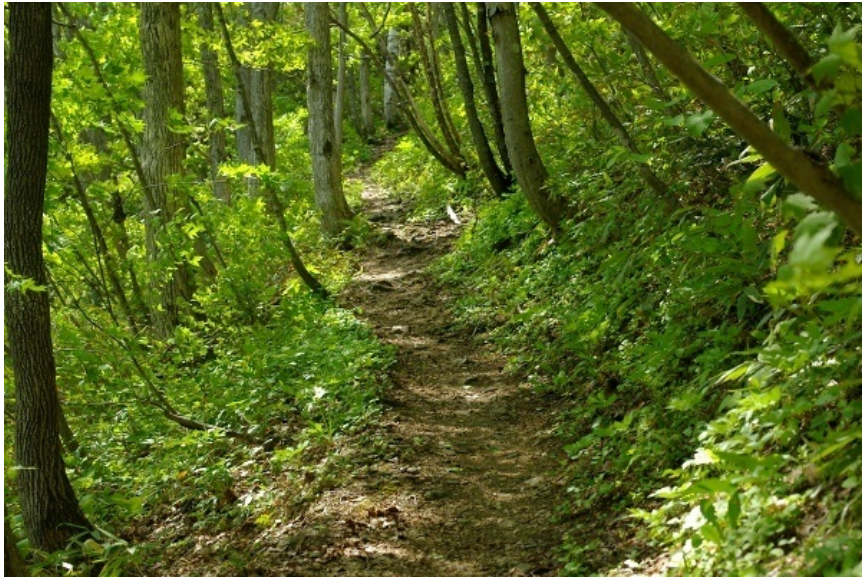
南の風と交代に 精霊の供をするのが我が役目

この地で生まれた私にとって 風として生まれた私にとって

北の大地を精霊と 共に巡るは名誉なこと

新緑の林で待つ間 私の体はかたくなり

木々の葉は 息を飲んで動きを止める



南の風を帰した後

夏を告げる精霊は 私に向かい笑顔を見せた

「そんなに恐れることはない

さあ 私を乗せて出かけるのだ

いらぬ心配はせぬがよい 私がついているのだから」

精霊の命ずるままに 私は木立の間を通り抜ける

夏の知らせを聞いて 花は開き

木々は 思いっきり枝を伸ばす





山の麓から順番に 精霊は夏を告げていく

登るにつれて気温は下がり 頂上では残雪が

まだかまだかと待っている 精霊と私を待っている

汚れた雪が私に願う 早く私たちを溶かしてください

暖かい風を吹いてください

この汚れた衣装を脱ぎ 綺麗な水となって流れていきたい」

私は思わず息を吸い込み 力いっぱい吹こうとした

その時 夏を告げる精霊が 厳しい声でたしなめた

「余計なことをしてはいけない」と



精霊に命じられ 私は空高く昇っていった

「山肌に残る雪がお前にも見えるだろう

もしもあの雪が一度に溶けたなら

お前が手を貸し 全ての雪が水になったなら

麓の川は溢れ 洪水になり花は溺れ 木は倒れる」

私は恥じ入り言葉もない

「山肌に残った雪は徐々に溶けて 天に昇るか地に潜る

それが定められた運命なのだ」



精霊の言葉を噛みしめて また地上へと降りていく

ハクサンイチゲの白い花びらが

険しい山肌に根を下ろした白い花が

私たちを笑顔で迎えてくれた

「この北の大地にも やっと夏が来ました

どんなにこの日を待ったでしょう

たとえ短い間でも 精霊のお姿を見られる私たちは幸せです」



山の頂からゆっくりと

精霊を運んで 私は降りていく

ミヤマアズマギクの花びらが

大きく開いて歓迎する

「夏なのね 夏なのね やっと夏が来たのね」と

歓喜の音が耳に届く

夏を告げる精霊は 薄紫のはなびらに 答えるように微笑んだ



エゾハクサンイチゲの白い花も

北の大地に咲くこの花も

負けじと体を大きく揺する

「とても短い夏だけど 私たちは精一杯 この季節を楽しみます」

夏を告げる精霊は 大きく頷き 花に触れた





次に出会ったサンカヨウは

雨に濡れて 儂げだ

白い花は透き通り いまにも破れてしまいそう

夏を告げる精霊は サンカヨウに語りかける

「太陽に身をさらし 光をいっぱい受けなさい

やがて花びらはもとにもどり お前も元気になるだろう」

花びらが揺れないようにと 私は空気の流れをとめた



山を下る途中にも まだ雪は残っている

それでも新しい緑の葉が

黄緑色の美しい葉が

歓喜の歌を聞かせている

冬を過ごした木々の葉にも

新しく生まれた若い葉にも

夏を告げる精霊は 等しく微笑みを投げ与え

歓喜の歌が山にこだました

雪解け水を流す滝が 眼下にそろそろ見えてくる



夏を告げる精霊は 私に向かってこう言った

「そろそろ元の林に戻る時 試験飛行は終わったのだ」

私は驚いて問い返す 「試験飛行なのですか？」

「そう これはお前が精霊の供として 相応しいかどうかの試験なのだ」

私は思わず顔を伏せた 夏を告げる精霊は 微笑みながら私を見た

「大丈夫 合格だ かなり未熟ではあるけれど 私が次に来るまでに

立派な供になるように しっかり励んでおくのだよ」

私が顔をあげたその時は 夏を告げる精霊が すでに去った後だった

-end-